

ミクロ経済学II（第10回）

平成20年度第1学期
名古屋大学経済学部
花蘭 誠

過小供給の理由

- **最適供給条件**： $u_1'(x) + u_2'(x) = C'(x)$
公共財追加的一単位からの**社会的便益=MC**
- **自発的供給の最適化条件**： $u_i'(x) = C'(x)$
公共財の追加的一単位からの**個別便益=MC**
- **自発的供給**：他者への影響(外部経済効果)を無視。限界費用は全額負担。⇒ 過小供給

解決策：リンダール機構

費用負担が個別便益に比例すればよいのでは？

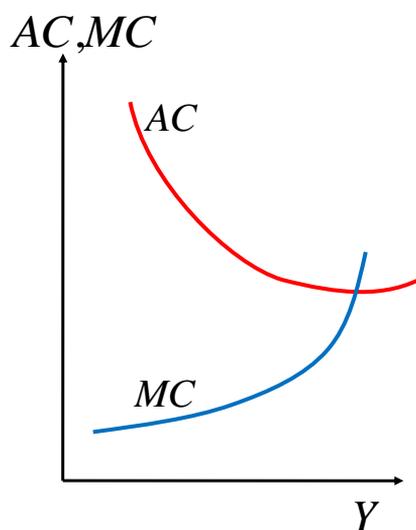
- **リンダール機構**：
各消費者 i は所与の**個別公共財価格** p_i に直面。
 \Rightarrow 公共財需要 $u_i'(x_i) = p_i$
- **リンダール均衡**：
各消費者の公共財需要が $x_i = x$ (共通)
 $\Sigma p_i = C'(x)$ ：公共財供給者の利潤最大化
 $\Rightarrow \Sigma u_i'(x) = C'(x)$ ：**最適供給**

考察

- 個別の効用関数、費用関数がわかれば、リンダール機構を用いればよい。
- 効用、費用をいかに把握するか？
- 各個人の申告？個人は自分に都合のよい結果が生ずるように、申告を操作する可能性あり。
- 私的情報を引き出すインセンティブ：真の情報を伝えたときに得をするように設計。

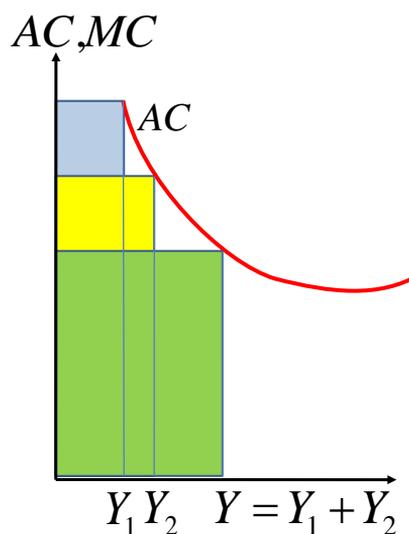
固定費用再考

- **平均費用逡減産業**：ACが(相当大きな範囲で)逡減する産業。
典型的には、固定費用の大きい産業。
- 鉄道、電力、水道、ガス、など



劣加法性

- $C(Y)$ が生産量 Y で劣法的：
 $Y_1 + Y_2 = Y$ のとき
 $C(Y_1) + C(Y_2) > C(Y_1 + Y_2)$
(3企業以上でも同様)
- AC逡減する Y では、 $C(Y)$ は劣法的
⇒ 平均費用逡減産業では、1企業に生産させるのが効率的



自然独占

- **平均費用逡減の帰結：**
 1. 大きな企業がより低い費用で生産
⇒ 小さい企業が淘汰される ⇒ 独占(**自然独占**)
⇒ 独占企業による独占力の行使 (社会的コスト)
 2. 劣加法的費用関数
⇒ 一つの企業が生産する方が、複数企業より効率的
- **政策的含意：**一つの企業に生産させるべきだが、独占力を行使させないように価格規制する。

練習

- 需要関数 $D=10-p$, 企業の費用関数 $C(q)=F+2q$, $F>0$ であるとする。
 1. 独占価格と、供給量をもとめよ。独占企業が正の利潤を得るための F の範囲を求めよ。
 2. 2企業によるクールノー均衡を求め、各企業が正の利潤を得るための F の範囲を求めよ。
 3. 自然独占の生じる F の範囲はどこか？

公共料金

- 財・サービスの取引を社会的に望ましく行われることを目標として、政府が設定する価格。
- 価格規制(原則)：限界費用価格 ($MU=MC$, 社会的余剰の最大化より)
- **補助金の必要性**： $AC >$ 公共料金 のとき、供給企業は赤字経営 \Rightarrow 撤退を避けるため、補助金による赤字の補てんが必要。

規制と保護の弊害：X非効率

企業の経営努力の欠如、企業内部の士気の低下
 \Rightarrow 企業の内部からの要因でコスト増(**X非効率性**)

- 対策：
 1. 評価、監視の仕組みの強化
 2. 民営化
 3. 同業他社との比較(ヤードスティック競争)

ヤードスティック競争

- **相対評価の導入：**
比較可能な同業者との業績比較
(例：他地域の電力会社などの公益事業体)
- **業績の比較：**産業に共通な攪乱要因を除去
企業Aの業績が悪く、Bの業績がよい
⇒Aは高い確率でサボった！
企業Aの業績がよく、Bの業績が悪い
⇒Aは高い確率で努力した！
- **言い訳がし難くなるため、事前の努力が高まる**